

カンボジア中央部セン川下流部におけるプレアンコール期王都と地形環境

Pre-Angkor capital city and its surrounding geomorphology in the Stung Sen River drainage basin, central Cambodia

南雲 直子^{1*}, 須貝俊彦¹, 久保純子²

Naoko Nagumo^{1*}, Toshihiko SUGAI¹, Sumiko KUBO²

¹東京大学大学院新領域創成科学研究科, ²早稲田大学教育学部

¹The University of Tokyo, ²School of Education, Waseda University

カンボジア中央部セン川下流部に位置するサンボー・プレイ・クック遺跡群は、プレアンコール期真臘国の王都イーシャナプラに比定される遺跡である。遺跡はセン川に面するように建設され、複数の水路跡も見られることから、水上交通を重要視していたと考えられる。本発表では、セン川下流部の地形特徴をもとにサンボー・プレイ・クック遺跡群の立地環境について考察を行った。セン川はダンレック山脈を源とするトンレサップ水系最大級の支川の一つであり、流域面積約16,000km²、幹線流長約500kmを持つ。下流部では台地沿いに幅7 kmの氾濫原を流下し、箱型の横断面形を持つ深度7m前後の流路を形成しながらトンレサップ湖へ流入する。雨期と乾期の季節変化によって毎年規則的に水位が変化し、その水位差は年間約7mに達する。氾濫原沿いの台地は、高位のものから順に、起伏に富んだ台地I面、雨期の氾濫でも浸水の可能性が低く、比較的平坦な台地II面、氾濫原との比高が2m程以下の台地III面の3つに地形区分された。サンボー・プレイ・クック遺跡群は、台地II面に立地する。台地面は主に石英からなる砂質の堆積物で構成されるが透水性が低く稲作が可能である。河道は自由蛇行しながら顕著なメアンダースクロールを形成する一方で、後背湿地では浮流物質が年間0.6mmの速さで少なくとも過去4,600年間堆積している。セン川の氾濫原と最下流部のトンレサップ湖岸平野は5つのゾーンに区分され、台地へのアクセスビリティという視点から各ゾーンを評価した。その結果、サンボー・プレイ・クック遺跡群と隣接する港が位置するゾーンIIが雨期の氾濫に対して最も安定的に水上交通を利用できるエリアであることが示された。氾濫原は雨期の降雨や氾濫の影響を強く受けるが、河川への優れたアクセスビリティを有する。しかし河道近くでは激しい流路変化によって側方侵食のリスクが高まる。一方、台地は氾濫原との比高によって雨期の水上交通の利便性は劣るが、雨期の氾濫による影響は少ない。そこで、集落そのものは雨期の氾濫に安定的な広く平坦な台地に、水上交通に必要な港は河道沿いに建設した。そして集落と港を水路で結ぶことにより、雨期の交通動線を確保していたと考えられる。

キーワード:地形分類図,セン川,蛇行,サンボー・プレイ・クック,カンボジア

Keywords: land classification map, the Stung Sen river, meander, Sambor Prei Kuk, Cambodia